

集う家

時代を重ねることに私の住まいは、町から家へ、家から個室へと活動範囲が狭まり、VRなどの仮想空間が実現した時には、リアルでは誰とも顔を合わせずその場から一歩も動く必要がないような空間が生まれるだろう。そのような転換期を迎える現代に、私は今一度人と人が顔を合わせて集うことの重要性を問う住宅を提案する。



集う家に集まることによって、町に対して何か言葉にもならないような懐かしい思いを感じられる空間が広がる。



居間を取り巻く壁のような通路が人々のアクティビティを受け止める。



居間の壁で自分の作業をすることによって、人や町と気配によって繋がる。



垂直に広がる多様なアクティビティが、阿佐ヶ谷の街並みを鮮やかに照らす。



表と裏を繋げることによって、街に深みを与える。

Research

阿佐ヶ谷の町並み

計画地の面する通りを歩いていると、米屋や布団屋、銭湯など昔懐かしい建物がいくつか建ち並んでいる。また、敷地の北側は小さな路地があったりと、いろんな場所でどこか懐かしい町並みが私たちを出迎えてくれる。阿佐ヶ谷の町には人々の集う場所としての魅力がたくさん眠っている。



計画地に面する通りに残っている懐かしい建物。

通りのふるまい

一昔の通りでは、軒先で風呂敷を広げて商いをしたり、椅子を持ってきて酒を交わしたり人らしいふるまいがあった。しかし現在の通りは、車が走り危険が増し歩行者が減少したため陰鬱なものとなってしまった。かつてのように、生き生きとした場所として、住まいの領域として、遊びの場として、そして歴史の場としての通りを考え直さなければならない。



通りは人々にとっての大切な居場所である。

Design

間のある家

本提案では、間という概念を一つの建築装置として用いて、部屋と部屋、あるいは部屋と通りを連続的に繋ぎ合わせていく。ある時には、間が段差となり座る場所や、気配を感じながらも人で居られるような空間を私たちに提供してくれる。

コミュニティの電波塔

人々の暮らしが大きく変化している中で、阿佐ヶ谷は今も大切で昔の暮らしと町並みを残している。そのような伝統的な町の中において、今一度人々の暮らしによって人と町をつないでいくことの大切さを発信する電波塔として建ち振る舞うような住宅を作り上げる。

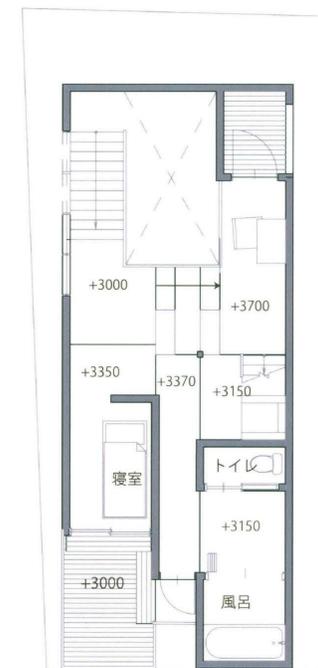


表通りから見た住宅のファサード

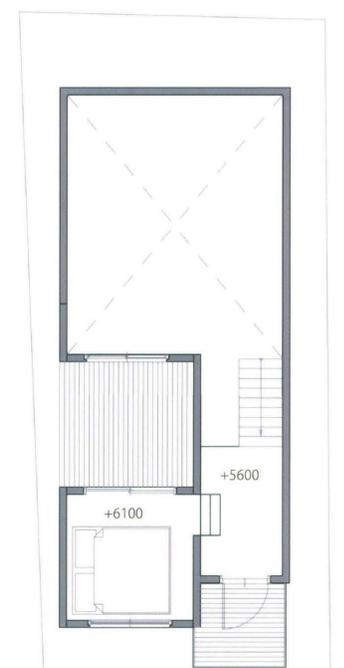
この住宅では、個室としてはっきりと区切られた部屋はない。居間を中心としてその周りを立体的に取り囲む壁のような通路が住む人の作業場となる。間によって生まれた段差で座りながら本を読んだり、階段の下のたまりのようなスペースで繋がっている安心感を持ちながら、孤独を感じられるような空間が、町と繋がりがながら多様に広がる。



1F Plan 1/100



2F Plan 1/100



3F Plan 1/100